

# 六花



俳句雑誌りつか

2014 (平成26年)

cover design Yuna Mizuno

11



しん  
親

菊の香や

山田六甲

高瀬川色なき風に流れけり  
くるぶしの浅さに澄める高瀬川  
岡持の片手自転車菊の昼  
返りては流るるさくら紅葉かな  
秋風や四条木屋町仏光寺  
仏光寺のつき当たりどす秋簾  
秋日さす茶碗に息を呑みにけり  
菊の香や誰<sup>たが</sup>目ぬくめむこの茶碗  
秋日差す町<sup>まち</sup>家<sup>や</sup>二階の畳べり  
こぢんまり秋の灯に住みたかり  
野々宮に秋の蚊遣をくすべしよ  
栞りけり辻邸前の柿落葉  
去来忌の小さく四角き畳かな  
去来の墓地逢魔時へすがれ虫  
西行の井戸や秋澄みつつ昏む

記憶のスケッチ

菊谷 潔 モルファ蝶陶器展

高瀬川壺に光を返しけり

酢のほふ木屋町通秋うらら

桜紅葉うち返りては流れけり

流人にも触れしや桜紅葉して

橋渡る片手自転車水の秋

菊の香や誰が手飾らむ瑠璃茶碗

秋の昼一見さんはお断り

新豆腐より顔白し舞妓はん

半玉の稽古風呂敷秋すだれ

秋蝶のこころの彩に出でにけり

浅川の明るさを壺返しけり

秋灯にはねたる彩を楽しまむ

瑠璃茶碗京の秋日のさしにけり

浅川の光差し入れ秋潔し

青色に目眩んでゐる秋日中

菊の香に心躍れる茶碗かな

秋日さす陶師は額少し上げ

秋蝶の溶けて入りたる茶碗かな

菊の薫や陶師はひかり失はず

水澄むや手首ほどなる高瀬川

水澄むやくるぶしほどの高瀬川

穏やかに時には急いで秋の川

くるぶしの深さに澄める高瀬川

秋蝶のかがよう部屋へ靴を脱ぐ

茸めし食べむとすれば準備中

石橋を渡れば店にきのこ飯

小料理屋さくら紅葉の蔭にあり

川柳かわやなぎとところどころに散り込める

どの店も橋を入口柳散る

秋簾二階に人の気配あり

鴨川へ風の近みち水木の実

料亭に画廊挟まれ水木の実

うなぎ屋に団扇の音や秋暑し

子に乗せて自転車通る黄葉かげ

秋の昼木屋町通人気なく

黄葉かげ所どころを煉瓦道

シーソーを遊ぶ子もなし秋の昼

秋濁句帳も持たずベン持たず

この先は五条大橋柳散る

水木の実その上を鳩仏光寺

折り返しをれば木の根に秋の声

提灯の秋の簾に傾きぬ

料亭の裏は浅川秋簾

緑青の橋の欄干水澄めり

橋元の秋海棠に水をやる

結局は卵包たまごあんま御飯なり秋濁

嵯峨野へ

嵐電の逆光となる黄葉かな  
嵐電の線路の匂ひ秋惜しむ  
大宮の秋を惜しめと発車鈴  
嵐電の客ちらはらと秋日差  
帷子ノ辻も過ぎけり柿もみぢ  
寺前の駅の溝なる赤のまま  
嵯峨野かな豆腐にはよき水の秋  
秋日傘ななめ坐りに茶の床几  
小豆引間近にしたる小倉山  
柿落葉踏んで名門女高生  
柿すすする名にし負うたる小倉山  
落柿舎や小豆畑を目の前に  
色鳥の影に飾られ去来祭  
あご撫でて去来顔なる秋思かな  
去来の墓なでて背中へ秋の暮

秋日なかな享子の墓の見あたらず  
西行井澄む水を酌む杓もなし  
柿の客四角き布を尻に敷き  
この先は化野道と残る虫  
散る柳巻き上げ人力車の通る  
顔あげて見渡しぬたる鹿威  
鹿威聞こえて来たる垣根越し  
ちらはらと彩るがよき柿落葉  
柿落ちし時もその音鹿威  
秋草の嵯峨野の匂ひとつとせぶり  
西行の井戸を覗けば秋の声  
化野へ行く道聞かれ秋の暮  
落柿舎に秋を惜しみて帰りけり  
国乱れ国民体育の日の嵯峨野  
人力車途中で乗れず秋の暮  
秋の暮みなどはぐれし巨漢

秋の夜の下車の駅まで立ち通し  
加古川は冬かと思ふ秋の夜  
雉 感  
オリオンへ旅を戻りし水の星  
とび石の一つ浮きたる小春かな  
しみじみと木の実に背中打たれけり  
秋天のかすかに映りぬる手水  
さざ波の雲母に鴨の包まるる  
鴨の餌父と娘の分かち合ふ  
一本の紅葉はるかにしてをりぬ  
湖畑の今津の葱を引きにけり  
足許の灯も親しめと紅葉宿  
新豆腐なれや雪花菜も自ずから  
目で削りをればひよこへ新豆腐  
人肌の首を撫でをり秋の暮  
青空の深きより来ることりかな

滝壺の淀みし色の美しき  
口渴くまで滝壺に近づきぬ  
滝壺につき出し枝の打たれをり  
本滝の光増しつつ落ちにけり  
一本といふのがよろし女滝  
木洩日に負けぬ一条女滝  
青羊歯の色に落ちけり隠れ滝  
日の満ちて滝の細身となりにけり  
掠めゆく鳥に滝音高まれり  
菜箸の先代ゆづり滝見茶屋

# 手を浸すいつから滝になったのか

## 赤松有馬守破天龍正義

てをひたすいつからたきになったのか あかまつありまのかみはてんりゅうまさよし

手を浸すいつから滝になったのか

滝落ちて緑濃き水生み出せり

人気なき滝道のぼるラヂオかな

もう二度と添ひ寝はせぬと巢立鳥

秋めくや白兔海岸赤き波

滝壺に手を浸しながら「この滝はいつから滝になったのだろう」と見上げ、思いを巡らす。悠久の時と磐を刻む滝の歴史と泡沫のような人間との対比。思いは滝の起源にまで遡り、人間が滝として認識した時からが滝なのか、それ以前から滝は滝であったのかと思索。哲学という形而下は「かたちのあるもの」で、形而上とは「かたちを知覚できず形をこえたもの・無形」という意味。美術表現の中にはこの形而上的な事柄をなんとか目に見える形で表現しようとする試みがあるがこの句のように逆に形而下の物(滝)を形而上(心・疑問)的に発展させてみることも大切。赤松は俳句を信じられるようになった。俳句らしく整えず素直な句になったのが佳い。解ルトハ変ルコト。

# 雪卿集

大暑

松本文一郎

暑に耐へてベルトの穴を増やしけり  
大暑かな橋の名多き停留所  
炎昼の図書館浸り昼を抜く  
夏川に逢魔が時の河童かな  
落蟬の所構はぬ裏返し

修士

梶浦玲良子

蟻地獄のぞき込んでる修士かな  
海峡へ桜桃の種とぼしけり  
鳩の巢を揺らして山の浮き沈み  
日を返す姫街道の今年竹  
芍薬の香りかすかに少女過ぐ

# 雪卿集

滝

升田ヤス子

ほうたるの背山の闇のうねりけり  
もう一度水の生まるる滝の段  
岩肌に適ひつつ落つ雌滝かな  
穴子焼くうちわに乗せて裏返し  
心電図とり来し夜の鈴虫よ

桔梗

市川伊團次

鉦叩皆が聞こえてゐると言ふ  
玄関の戸外を向いてゐる桔梗  
川風に予定調和の虫の声  
目が合せてしばし金魚と見つめ合ふ  
朝刊に雨一粒や台風来



# 雪樹集

題 無し  
田尻 勝子

鈴虫の鳴き出づる時止む時も  
滝裏の洞に筵の敷かれをり  
台風の好む木椰子の葉哮りたる  
かき氷波に千鳥の暖簾かな  
欲望の巨大化の果秋出水

枝 豆  
溝 渕  
弘 志

新米としつこく唱へよそひけり  
枝豆があるだけで良し友と酒  
栗飯や栗だけ食べる孫二人  
鉢植の秋茄子一つ残りをり  
夕食は塩少々にふかし芋

# 蛩雪譚

六甲選

※メモを持ち歩かなくなったら本物。

二十六年十一月号鑑賞

菜箸の先代ゆづり滝見茶屋

笹村 政子

俳句の旅人政子よ、今月の句ではこれが一番佳い。商いの菜箸を家庭の主婦の目で捉えた。菜箸さえも美味しそうに思える。この「おでん」用の菜箸は何代もおでんの出汁がすぎ足されて来た歴史を一番吸い込んでいる。この句に多言を費やす必要は無かる。伝統的菜箸を読者が味わえばいいのである。

滝壺の淀みし色の美しき

俳句は直接形容する言葉を嫌う。そう初心者には教えられて来たはず。なぜか、言い尽くしてしまうから、というのが理由。逆に言い尽くしてしまわなければいけないのは、短歌で、俳句は「美しく作者が感じているのだろなあ」と思わせるよう、含みのある表現をするのが俳句の特徴というか、そういう性質の文芸。それはたびたび言うことであるが、俳句の読者は、即ち作者で、俳句をしない純粹読者には鑑賞できないことでも、俳句作者はその含みのところを鑑賞して味わう力を持っている。そういう観点からいうとこの句の「美しき」がもし澄明な滝壺の水なら美しいという表現は平凡すぎるが、淀んだ色が美しいと意外なことを詠んだので美しいという表現が肯定される。だがなんでもかんでも特殊な美しさを見つければいいのかというと、特殊性と意外性の



違いがあつて、俳句では目先の変わった特殊なことを言うのが佳  
いと思うのは早計で、意外性のほうを大切にすべき。掲句の場  
合「淀み」とは水や空気などが流れずに溜まっていることで、ど  
んよりと濁ることともいう。その濁りに美しさを感じた、としたの  
は政子のいわば冒険の一つで、読者を「なるほど」と納得させる  
域まで達しないかもしれぬが、こういう挑戦を重ねることで、  
本物になつてくるはず。「淀んでいるところが美しい？」という批  
判もあるが、それを恐がつては前に進めない。石川遼のゴルフ  
が強かつた理由はパットをオーバー気味に打つた向こう見ずの強  
気にあつた。が最近届かないことが多い。いくらホールに向かつ  
て打つても届かなければカップインは絶対あり得ない。こういう  
思い切つた冒険をするために政子は十句発表できる場を持つてい  
る。もちろん読者に通じない観念に陥る危険もあるが、思い切り  
打つことも必要である。その中おどろくような句を授かると信じ  
ている。(以下略)

六花集

住田千代子

ころがりて光となれる蓮の露  
風止んで風鈴の舌伸びにけり  
蒲の穂の丈を違へて繁りけり  
ゆつくりと沼を動かす青みどろ  
あめんぼの蹴りの大きく進みけり

赤松有馬守破天龍正義

手を浸すいつから滝になつたのか  
滝落ちて緑濃き水生み出せり  
人気なき滝道のぼるラジオかな  
もう二度と添ひ寝はせぬと巢立鳥  
秋めくや白兔海岸赤き波

平居 滯子

炎天下ベルリンの壁寺に立つ  
姉の恋受け入れ難く明易し  
虫籠を抱へしままの昼寝かな  
黄菅咲く山のホテルの青き屋根  
穂高岳見むとて夫のサングラス

廣畑 育子

くもの囀のゆるみに小さき水の玉  
芝行けば方々跳べりぼったの子  
箒草こんもり犬の背のやうに  
登校児立簀くぐりてまた抜けて  
灸花月に揺れぬしベンチかな

秋田 典子

転がりて落ちる西瓜の鈍き音  
塩持ちて一人で向ふ墓掃除  
乾涸びる守宮軍手でつまみけり  
シロップをかけ放題の夜店かな  
手火花にライターの火を急かされぬ